

# 外国につながる若者の社会関係資本とキャリア形成 神奈川県立高校卒業者の事例調査から

小林 宏美\*

1990年入管法改正から30年以上が経過し、ニューカマー外国人の定住化が進んでいる。すでに、ニューカマー外国人を親にもつ世代が、労働市場に参入する年齢となっている。本稿は、外国につながる若者がどのような進路を選択しキャリアを形成しているのかを社会関係資本（Social Capital）の概念に着目し、その影響について分析する。調査対象者は、出身国で幼少期を過ごし学齢期に親に呼び寄せられ来日後高校に入学し、卒業した若者11名で、対象者に対して半構造化インタビューを実施した。

分析枠組みとして、結束型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本の概念を用いた。調査の結果から、調査対象者全員が複数の社会関係資本とつながっていた。結束型社会関係資本とつながりがあった者3名、橋渡し型社会関係資本とは全員がつながっていた。とりわけ、橋渡し型に関しては、調査対象者らが学校や地域の様々なアクターと結びつくことで、学業や進路選択における不利な状況を克服できる可能性が示唆された。進路やキャリア形成に必要な情報を親から得ることが容易ではない外国につながる若者にとって、地域社会における多様な人、もしくは集団とのつながりが彼・彼女らのキャリア形成に重要な役割を果たすと考えられた。

**Key words：**外国につながる若者，結束型社会関係資本，橋渡し型社会関係資本，キャリア形成

## 1. 問題の所在と目的

1980年代の国内の人手不足を背景に、1990年6月に改正入管法が施行され<sup>1)</sup>、ニューカマーと称される外国人労働者が増加した。それに伴って日本の学校に入学する外国人児童生徒も増えた。日本では戦後、外国人児童生徒に対して義務教育が権利ではなく恩恵という形で提供されてきたため、外国人児童生徒の背景や文化を考慮しない同化教育に対して、奪文化化、不就学などの問題が指摘されてきた（太田2000；宮島・太田2005；佐久間2006）。

一方、近年の日本における移民研究では、アメリカで蓄積されてきた同化論の知見を援用した移民

第二世代の研究が増えている。とくに、アメリカにおいて1965年移民法改正以降増えたアジアやラテンアメリカ出身第二世代のホスト社会における教育達成や適応過程について、Portesら（2001）が提唱した「分節的同化論」を日本社会に応用する研究が挙げられる（Takenoshita et al. 2013；是川2018；清水ほか2021）。しかし、古典的な移民国家であるアメリカの同化論をそのまま日本社会に適用することには、注意を要するとの指摘もある（樋口・稲葉2018；額賀2021）。その理由として、アメリカではエスニックな紐帯が存在するエスニック・コミュニティを介して社会関係資本を利用できるのに対して、日本ではエスニック・コミュニティが十分に発達していないことが挙げら

---

\*人間学部コミュニケーション社会学科

れている。

1990年入管法改正から30年以上が経過しニューカマー外国人の定住化が進み、ニューカマー外国人を親にもつ世代が大学進学を果たしたり、労働市場に参入したりする年齢となっている。本研究では、出身国で幼少期を過ごし、学齢期に親に呼び寄せられ来日し、日本の高校を卒業した外国につながる若者に焦点をあて、高校卒業後、彼・彼女らがどのような進路を選択しキャリアを形成しているのかを考察する。一口に外国につながる若者といっても、出身国や来日年齢・時期、来日経緯に差異があり、来日後の経験も様々である。そこで、調査方法としては、調査対象者一人ひとりのライフストーリーを型にはめることなく捉えるため、半構造化インタビューを行った。

なお、1990年代以降増加したニューカマー外国人の子どもには、多様な人々が含まれる。ニューカマー外国人を1世として、その子どもを2世として移民第二世代という呼称が使われることがある。本稿では、出身国で義務教育を終えた、あるいは義務教育途中で来日し、日本の中等教育を経験し社会に出た若者を中心に議論を進めるため、移民第二世代ではなく、「外国につながる若者」という用語を用いる。

## 2. 分析視角

分析においては、社会関係資本 (Social Capital) の概念に着目し、その影響について明らかにすることに主眼をおく。社会関係資本の概念は、1980年代に入り、ピエール・ブルデューやジェームズ・コールマン、ロバート・パットナムなど複数の社会学者らによって論じられ注目されるようになった。パットナム (2006) は、社会関係資本を個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範であると定義し、社会関係資本を「結束型」と「橋渡し型」に区別した。結束型社会関係資本は、特定の互酬性を安定させ、連帯を動かしていくのに都合がよい。例えば、少数民族集団においてみられるネットワークは、コミュニティのメンバーにとって、重要な精神的、社会的な支えとなる。一方、橋

渡し型のネットワークは、外部資源との連携や情報伝達において優れ、より広いアイデンティティや互酬性を生み出すことができる (パットナム 2006: 9-28)。また、パットナムは社会的ネットワークが、貧困など家族が抱える問題によって生じるリスクを回避しポジティブな恩恵をもたらすとして、社会的ネットワークが子どもの健全な成長にとって非常に重要であると指摘する (パットナム 2006: 362-374)。

社会関係資本の教育への影響についての初期の研究として、コールマン (2006) は親同士が社会的ネットワークで結ばれているコミュニティであったり、親がコミュニティの諸機関と関わりを持ったりしている場合、そこには子どもの成長にとって価値のある社会関係資本が存在すると論じる。カトリック系学校の中退率が低いのは、学校外の社会関係資本つまり親同士も、宗教儀式などを通じて紐帯が強いからである (コールマン 2006: 230)。ジョン・フィールドは、マイケル・ウールコックが定義した「連結型」社会関係資本<sup>2)</sup> という概念を前述の2種類の社会関係資本に加えて、人は3種類の社会関係資本の異なる組み合わせを持っており、それが異なる結果をもたらすと論じる (フィールド 2022: 10-52)。

## 3. 先行研究の検討

本節では、社会関係資本と外国につながる若者の教育やキャリア形成に関連する先行研究について概観する。塩原 (2011) は、外国につながる子どものロールモデルとなりうる同胞のメンターは結束型・橋渡し型双方の側面を持ちうるのに対し、日本人学生のメンターは橋渡し型の社会関係資本を強化すると指摘する。そして、橋渡し型社会関係資本はライフチャンス拡大していくために不可欠で、日本人と外国人の垣根を超えたつながりを創出する「越境的な社会関係資本」の役割を提唱している。

Lancee (2010) は、オランダにおける移民労働者を対象にした実証研究から、移民第一世代と第二世代において橋渡し型社会関係資本は労働市場における成功に有用な一方、結束型社会関係資本

の経済的な効果はほとんど見られなかったとしている。また、男性と女性では違いがみられ、男性において結束型社会関係資本が橋渡し型社会関係資本の構築に役立っているとしている。

志水（2014）は、人と人とのつながりを大事にする学校の教育実践が、大量の社会関係資本を生じさせ、子どもたちの基礎学力の水準を下支えすると述べる。学力調査の結果をもとに、教師と子どもたち、教師同士、教師と保護者、学校と地域との間で、緊密で大量の社会関係資本が蓄積されていていることを見いだした。子どもたちの周囲には、彼らのことを大事に思う大人たちのネットワークが張りめぐらされ、そうした環境が子どもたちの基礎学力を支えていると論じる。

オチャンテ（2020）は、外国人生徒の高校進学率が全国レベルで50～60%台にとどまるなかで、三重県伊賀市の移民第2世代の高校進学率が9割に達している背景として、行政や地域のボランティア団体による支援の充実や高校進路ガイダンスで外国出身のコミュニティ・リーダーが相談員とし

てロールモデルの役割を果たしていることを指摘している。一方、日本における移民第二世代の大学進学は、特別入試で門戸が広がったが、上位校は依然として第二世代にとって高い壁があるとの報告もある（樋口・稲葉 2018）。

しかし、学齢期に來日し、日本の高校を卒業した外国につながる若者のキャリア形成について社会関係資本に着目して実証分析を行った研究は管見する限りない。

#### 4. 本研究における社会関係資本

表1に、結束型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本の特徴と事例を挙げた。結束型の特徴は、内向き志向、排他的なアイデンティティ、集団内の結束強化などであり、事例として、エスニック集団や宗教団体、地縁組織などがある。橋渡し型の特徴は、外向き志向、包含性・多様性、外部資源との連携・情報伝播などであり、事例としてNPOやボランティア団体などがある。

表1 社会関係資本概念図

結束型社会関係資本	橋渡し型社会関係資本
◇特徴 内向き志向、排他的なアイデンティティ、 集団内の結束強化	◇特徴 外向き志向、包含性・多様性、外部資源と の連携・情報伝播
例) エスニック集団ネットワーク、宗教団体・ 地縁的な組織等	例) NPO、ボランティア団体等

本研究では、結束型社会関係資本に関わる状況として、親子の関係（親が子どもの人生に深くかわっているかどうか、親の人的資本を子どもにも使える関係を構築できているかどうか）、親の出身国の親族・知人、同族コミュニティ、同胞の仲間・先輩などのネットワークの存在、同胞のロールモデルなどを想定した。橋渡し型社会関係資本に関わる状況として、学校の教師（外国人支援担当、部活顧問）や日本語指導員などの支援者の存在や活動状況、自治体や地域の学習支援教室、エスニック団体の日本人指導員・ボランティア、外

国につながる生徒のための高校進学ガイダンスの存在などを用いた。

#### 5. 調査対象と方法

神奈川県在県外国人特別募集<sup>3)</sup>（以下、在県枠）で県立高校に入学し、高校を卒業した外国につながる若者11名を対象に、2024年3月から5月にかけてインタビューを実施した。表2に調査対象者の概要をまとめた。調査方法は、対面（1名はオンライン）で2～3時間程度、半構造化インタビュー

を行った。使用言語は日本語で、インタビュー内容は対象者から許可を得て録音し、スクリプト化して分析データとして用いた。インタビュー項目は、来日の経緯や移動の経験、家族構成や家族関係、来日後の学校内外の生活やキャリア教育、言語使用、高校時代や卒業後の進路選択、就労状況などである。インタビュー調査にあたっては、対象者に本研究の目的を説明し、調査についての同意を得た。対象者の出身国は、中国 5 名、ネパール 3 名、フィリピン 2 名、ベトナム 1 名で、性別は男性 7 名、女性 4 名である。年齢は 10 代後半～20 代後半で、調査時点の滞日年数は 5 年～14 年であった。親の職業は、飲食店や料理人、自営業な

どである。母親が再婚し、日本人の父親を持つ者が 4 名いた。調査時点で、5 名は学生で（大学 2 名、専門学校 3 名）、6 名は就労していた。就労者の職業は、一般企業 4 名、地方公務員 1 名、フリーランスエンジニア 1 名であった。

本研究は大学の倫理審査委員会の承認を得た。インタビューで得られたデータは厳重に管理し、匿名化した上で調査結果は学術的目的にのみ使われること、研究成果の発表にあたっては個人情報とプライバシーの保護に配慮すること、回答を拒否することにより不利益はないことを文書と口頭で説明を行い、書面にて同意を得た。

表 2 調査対象者概要

仮名	性別	出身国	調査時年齢	JLPT	日本語以外の使用可能言語
A	男	中国	20代後半	N 1	中国語、韓国語
B	男	フィリピン	20代後半	N 1	ビサヤ語、タガログ語（会話のみ）、英語
C	女	中国	20代後半	N 1	中国語
D	女	ベトナム	20代後半	N 1	ベトナム語、広東語（会話）、中国語、英語
E	男	フィリピン	20代前半	不明	英語、ビサヤ語
F	女	ネパール	20代前半	N 2	ネパール語、英語
G	男	ネパール	20代前半	N 1	ネパール語、英語、ヒンディー語、ウルドゥ語
H	男	ネパール	20代前半	N 1	ネパール語、英語
I	女	中国	20代前半	N 2	中国語
J	男	中国	20代前半	N 2	中国語、福建語、福清語
K	男	中国	10代後半	N 2	中国語、福建語

注 1) JLPT とは、日本語能力試験のことで、習熟度の高い順に N 1 から N 5 の 5 つのレベルがある。

## 6. 分析結果

### 6.1 外国につながる若者と結束型社会関係資本

本研究の調査対象者は、学齢期途中で親に呼び寄せられたため、来日時の年齢や出身国での学校歴によって来日後の経験に差異がある。来日後中学に入学できた者もいれば、出身国ですでに中学を卒業していたり、年齢超過で中学に入れずフリースクールに通った後、高校入学した者など様々である。彼・彼女らが、日本社会においてどのような人と出会い、どのようなネットワークとつなが

りができたのか、そしてそれらが、その後の生活にどのような影響を与えたのか事例をもとに検討した。

表 3 は、結束型社会関係資本が、調査対象者のキャリア形成に影響を与えたと考えられるものを抽出した。結束型の指標として、「親子の関係」「親の出身国の親族・知人ネットワーク」「同胞の仲間、先輩」の 3 つを設定した。支援や影響の程度に応じて、「◎」非常に強い、「○」強い、「空欄」不明・なしとした。

表3 外国につながる若者と結束型社会関係資本

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
親子の関係				◎						○	
親の出身国の親族・知人ネットワーク											
同胞の仲間（同級生）・先輩							◎			○	

◎：相談した、支援、影響を受けた程度が非常に強い、○：強い、空欄：不明・なし

高校卒業後のキャリア形成に影響を与えた結束型社会関係資本については、Dさん、Gさん、Jさんにおいて確認できた。Dさんは大学卒業後、日本人学生と同様エントリーシートを書き面接を受け就職活動をした。自分が希望するような企業からなかなか内定がもらえず悩んでいた頃、母親の仕事の得意先である会社経営者の紹介で、その会社に就職した。Gさんは16歳で来日したが、年齢超過で中学に入学できず、ボランティア教室で半年間日本語を学び、翌年4月、在県枠で受験し高校に入学した。高校卒業後、進路が定まらない状態が続いていたが、同じネパール出身の友人Fさんから彼女が通っていたビジネス専門学校の話聞き、よさそうなのでその学校に進学したという。Jさんは中国で高校1年まで終えた後、6月に来日した。同じ年8月から母親の友人の紹介でフリースクールに通いはじめ、その先生のアドバイスを受けて在県枠で受験し、高校に合格した。また、

Jさんは高校3年から美術の塾に通っていたが、その美術の塾を紹介してくれたのが、高校1年のときに中国出身の友人たちと作ったLINE仲間の一人だった。

## 6.2 外国につながる若者と橋渡し型社会関係資本

橋渡し型については、校区内における社会関係資本を9つの次元に大別した露口（露口2016）の研究<sup>4)</sup>を参考に、外国につながる若者の社会関係資本と関係している考えられる7つを設定した（表4）。対象者全員が、キャリア形成において何らかの橋渡し型のネットワークの影響を受けていた。橋渡し型で最も多いのが、自治体やボランティア支援団体等との結びつきで、11名全員がつながりをもっており、その内7名は非常に強いつながりがあった。次に多いのが学校関係9名で、その内7名は非常に強いつながりがあった。

表4 外国につながる若者と橋渡し型社会関係資本

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
学校関係（担任教員、外国人支援担当、部活顧問、日本語指導員、多文化教育コーディネーター、ロール・モデルの提供）	◎	◎			◎	◎	◎	◎	◎	○	○
学校の友人・仲間、日本人生徒、部活仲間		○			◎			◎			
自治体、地域の日本語支援・学習支援教室(NPOを含む)のボランティア、外国人教育相談	◎	○	◎	○	◎	◎	◎	◎	○	○	◎
エスニック支援団体の日本人ボランティア											
アルバイト先上司、先輩、仲間					◎						
外国人生徒高校進学ガイダンス							◎			○	
日本人社会ネットワーク（職場、趣味）				◎							

◎：相談した、支援、影響を受けた程度が非常に強い、○：強い、空欄：不明・なし



### 6.2.1 学校や支援組織の積極的活用

AさんとHさんは、学校の日本語指導員や日本人生徒仲間、ボランティア支援団体など複数のネットワークと強いつながりを築いていた。Aさんは中国から来日したが、すでに中学を卒業していたため本人の意に反し日本の中学に入学できなかった。地元のボランティア教室に1年間通い日本語を勉強した後、在県枠で受験し高校に入学した。高校卒業後は推薦入試でL大学中国語学科に進学した。Aさんは大学受験の準備の際に高校の教員や日本語教師の指導を受けたことについて、「指定校推薦は、面接だけです。あと、小論文。面接の準備は、一応、僕は、学校の先生、よくあるのが、知り合いの先生しか頼まない。面接の練習、面接官の役割してくれたりとか。僕は、教頭先生まで頼んだんですよね。たぶん、20回、30回ぐらいやりました。毎回違う先生」と語った。Aさんは大学生になり、ボランティア活動で外国につながる子どもを支援する立場を経験したことで、将来はその経験を活かせる行政の仕事に携わりたいと考えるようになった。公務員を目指し勉強し公務員試験に合格し、市職員として入職した。公務員試験を受けることについて親に相談したところ、自分のやりたいことをやっていいと言われたが、受験に向けての実的な準備は高校の教員や国際交流ラウンジ職員など、周りの関わりのある日本人の人脈を活用したという。

大きな決断をするときには、必ず親に相談する。ただ、これ以上詳しい話をしても、親はまず詳しい内容がですね、分からないので、やっぱりボランティア活動で知り合った人脈で相談する、というのは一番的確。助かったこともあるんですね。それこそNPOの理事長とか、財団の専務とか、法人の理事長とかですね。Mとか、N館とか。実はいろいろあるんですけど。O国際交流財団の人とかですね。（Aさん）

Hさんは来日後、5月に中学1年に編入したが日本語は全くできなかった。その中学は外国人生徒を受け入れるのが初めてで日本語クラスがな

く、すぐに学校がネパール語を話せる日本人通訳を授業に入れる形で母語支援を用意した。Hさんは日本語習得意欲が非常に高く、来日直後から自ら日本語学習の機会を増やすため積極的に周りに働きかけた。向上心が高く中学の進路相談では教員から定時制高校への進学を選択肢を提示されたが、全日制高校に行くことを強く希望し、自治体の国際交流ラウンジやボランティア日本語教室に掛け持ちで通い全日制高校に合格した。

1、2週間授業を受け通訳が入る授業はなんとかなったものの、それ以外はもうなくなったので、自分から校長先生に日本語を取り出して勉強したいとお願いした。午前中、学校で日本語の指導を受け、午後は週2日ボランティア教室で日本語を勉強した。土曜日の午前は大学の学習支援室で勉強し、午後はそのまま国際交流ラウンジに行くという生活を1年間続けた。土曜日の勉強は3年になるまで続け、高校受験は大学の学習室と国際交流ラウンジで準備した。（Hさん）

### 6.2.2 気にかけてくれる周りの大人のサポート

学校や地域のボランティア団体、学習支援教室など周りの大人たちからのサポートについて語る者が多かった。Kさんは美術系の大学への進学を希望していたが、高校卒業時まで思うように進路が定まらず、神奈川県が設置した公的施設の外国につながる子どものための教育相談窓口に、兄から紹介されて通った。その施設の中国語担当の相談員が親身になってアドバイスしてくれ、その人の薦めで専門学校への進学を決めた。Eさんは来日後、中学に編入した。外国人は一人だけだったが、クラスメートは皆優しく接してくれたという。中学時代の日本語指導員や地域のボランティア教室、高校時代の担任教諭、アルバイト先の先輩など、その時々に関わりのあった人や団体と強いネットワークでつながることができた。困ったことがあると、中学や高校の教員が相談に乗ってくれサポートを受けられた。大学入学後、新型コロナ流行の影響で授業がリモートになると、パソコンでの課題提出に苦労した。その時に相談に乗っ

てくれたのが、高校時代まで何かと相談していた中学時代の日本語指導員P先生であった。P先生は、オンデマンド授業の3,000字の課題を一緒に取り組んでくれたという。また、高校の担任教諭で部活の顧問であった教師から大学進学についてアドバイスをもらい、その教師が薦めてくれた大学を受験した。その教師が面接の練習もしてくれた。さらに、アルバイト先の先輩が柔道の元オリンピック選手で、その人から空港国際線ラウンジでの仕事を紹介され、そこへ入職した。契約社員で仕事は厳しいが、同世代が多く楽しいと述べていた。

R先生に薦められたので、自分で決めていなくて、決められなかったんで、R先生に全部、担任の先生と、部活の顧問の先生が同じ方なんです。だからすごくよくしてくださるんです。S大学は、R先生も薦められていたんで、だからあんまり自分、何もしていない。勉強だけ。(Eさん)

Gさんは16歳で来日したが、年齢超過で中学に編入できず、地域のボランティア教室に半年間通い日本語を勉強し、翌年在県枠で受験し高校に入学した。進路は基本的に自分で決め、受験や高校入学の手続きも全部自分でしたが、提出書類などわからないことはボランティア教室で手伝ってもらった。Gさんは進路未定のままで高校を卒業することになったが、そのことについて高校の教師が心配し進路について情報提供してくれたり、励ましてくれたことに勇気づけられたという。

先生たちは本当に良かったんですよ。T先生とか、2年生と3年生は同じ担任でしたので、本当にお兄さんみたいな感じで。進路についても、アドバイスとかも、「もし就職もしないで大学にも行かないのなら、1回、日本語学校に入ってみて」と言われたこともあって、連絡先から、住所まで全部言われて。(中略)あとはU先生、もう毎回毎回、「大丈夫なの」「何するの、大丈夫だよ、心配しないで。また今後できるから」と、ちょっと勇気をも

らえて。(Gさん)

BさんとIさんは、部活の顧問や日本語指導教員が親身なって自分のことを心配してくれたことへの感謝の気持ちを述べた。Bさんは来日後、中学2年に編入した。中学には他に外国につながる生徒がいなかったため、日本語の取り出しクラスがなかった。学校が週1回放課後日本語教師を派遣してくれたため、中学1年の弟と一緒に日本語を勉強した。高校は在県枠で受験し入学した。1年の時は英語と体育以外はすべて取り出し授業があったが、2年になると日本人生徒と一緒に授業を受けた。母親が教育を重視しており、在県枠の中でもできるだけ偏差値の高い高校に進むことを望み大学進学をすすめた。理系志望でV大学情報学科に特別入試を利用して進学した。大学卒業後大学院まで進み、調査時点でフリーのソフトウェアエンジニアとして働いていた。高校時代の部活の顧問が勉強についても熱心にみてくれたことを次のように語った。

部活をやっていたので、その部活の中に、キャプテンが学年2位と、もう一人の友達が学年7位なので、土曜日の部活が終わった後に、顧問の先生が数学の先生なので、もう一回勉強させられるとか、それに自分が一緒に連れて行かれただけっていう感じなんですけれども、そういう環境にはいたんですね。(Bさん)

Iさんは来日時、中国で中学を卒業していたので日本の中学に入れず、半年間フリースクールに通い高校受験に向けて日本語、数学、英語を勉強し、翌年在県枠で受験し高校に入学した。高校時代の日本語教師が非常に熱心に日本語の訓練をしてくれ、大学受験の面接や志望理由書の書き方の指導してくれたという。

W先生はめっちゃ親切で、日本語の訓練とか、日本語を書くとか、聞くとか、そういう訓練ってしてもらったんですね。

——推薦で中国語学科を受けるときに、先生

に何か相談したりとかしましたか？

そうですね、面接、書き込みとか自分、練習したんです。何を書けばいいのかなって、W先生に、志望理由書とか、（中略）（地域のいろいろな高校から生徒が集まり勉強する場所で、各学校から日本語指導員も集まる学習教室について）W先生は最初にそこに紹介してくれて、（Iさん）

### 6.2.3 日本人仲間との紐帯

前述のHさんは高校入学後、新型コロナ流行の影響で自宅で過ごす時間が増えたが、入学直後から大学進学することを決めていた。勉強はボランティア学習室を利用せず基本的に一人で頑張り、X大学経済学部一般入試で合格した。中学時代の部活の仲間が近所に住んでおり、その友人の家に遊びに行ったときに見つけた漫画や小説を日本語力向上のために読んだという。コロナ禍にあっても、勉強に対する意欲を失うことがなかったのは、中学時代の仲間の存在が大きかった。

幸いにも仲の良い友達が中3ぐらいになると部活関連でできたんですよ、3、4人ぐらいで。近くに住んでいたの、コロナ期間のときに、友達の家にお暇し行くぞと言って集まって。高校に入って、コロナ期間で、友達の家に行ったときに、たまたま漫画がたくさんあったので、漫画を読みあさって。そこから、ライトノベル、普通の小説よりは、アニメの原作とか、娯楽をメインにした小説であるライトノベルを、読んでみたら面白かったんですよ。語彙力自体もすごく高くはないので、まあ、全然僕でもそんなに苦勞せずに読める。友達が、お父さんが昔買った古い小説を、もう要らないと言えば、じゃあ、俺がもらおうと、それをもらって読んだりとか。（Hさん）

前述のEさんは中学時代の友人に恵まれ、その時の仲間と今でも交友関係が続いていることが支えになっている。

中学から高校までずっとディズニーに行ってきたんで好き過ぎて、中学の地元の友達で行くと本当に楽しいんで。

——悩みがあったら、そのときからの友達（中学の友達）にも相談したりはしますか？

します。お互いみんなします。特に今は、女の子もいるし、男もいるし。全員日本人です。仲間がいないと、たぶん、ここで立っていることもできていないのでよかった。大学に入ってから、全然うまく全員集められないので、お互いに空いている人たちだけを集めてみたい。でもみんな家に来るんで。泊まりとか。休みの日とかは飯行ったり、ドライブ行ったり。（Eさん）

### 6.2.4 居場所の存在

Fさんは、16歳でネパールから来日し中学3年に編入した。その学校は外国人生徒を受け入れるのが初めてで、クラスメートも最初は親切にしてくれたが、日本語ができず友達もなかなかできなかったのもので学校になじめず、次第に学校に行く意味を見いだせなくなっていた。しかし、学習支援教室に通いはじめ大学生に勉強を教えてもらったりキャンプに参加した後から、日本語力の上達を感じるようになり気持ちにも変化が現れた。

1週間くらいは、みんな助けてくれたし（中略）でも何回も聞くのも、自分的には1カ月経ってからは、中学行きたくない（中略）みたいな、嫌な気持ちがあった。（中略）日本語しゃべるようになったのは（中略）Y大って知っていますか？中学入った2週間後くらいにそこを紹介されました。（中略）私の日本語能力を上げたのは、そこに行ってからです。（中略）8月にY大からキャンプに行きました。そこに行ってから、みんなと話して、日本語もどんどんしゃべれるようになって、そこから帰ってきてからは、日本語がわかるようになりました。（中略）Y大の学習支援教室に入ってからよかった。そこから変わった。（Fさん）



中国出身のCさんは、来日後中学1年に編入し、在県枠で県立高校を受験し入学した。Cさんの両親は仕事で忙しく一緒に過ごす時間があまりなく、日本の学校制度に疎かったため、進路については基本的に自分で考え、学校の先生に相談した後、親に報告したという。中学から週2、3回国際交流ラウンジのボランティア教室に通ったが、そこは同じ境遇の仲間が集まり、勉強だけでなく中国語で会話ができる居心地のよい居場所であった。Cさんは大学院修士課程まで進み、その後広告IT業界に就職した。将来は、自分と同じ外国につながる境遇の若者のためのキャリア形成の支援をしたいと語っていた。

国際交流ラウンジがいっぱいあるんですけども、そのなかで支援教室みたいなのがありまして、自分は中学校から通っていて、高校からは自分から知り合いの先生に、続けてみてくれませんかって頼み込んで、高校も個人と個人のやりとりというか、ボランティアの先生に頼って、そこから先生たちと相談してっていう。(中略)ラウンジだと、中学の友達たちも放課後みんなそこに集まったりとか、話を聞いてくださる先生たちもいたりとか、母国語でしゃべれたりとか、そういうのがもう、放課後に集まる場所みたいな、そこは行きやすく居心地がよくってっていうのはずっと。(中略)正直、途中から先生とすごい勉強したいというよりは、しゃべり相手としていろいろなものを教えてくださったりとか、まあまあ勉強もできたり、そういうのが楽しくて、ずっとお願いして通っていました。(Cさん)

自分のキャリアというか、大学の選び方とかも全部そうですねけれども、当事者意識というのは、どうしても中に入っちゃうというか、外国につながる子として、何かしなきゃみたいな。関わってきた先生たちもこんなに助けてくれたし、なんとかしなきゃみたいな意識がどうしても入るっていうか、そういうキャリア支援というか。(中略)そういうもののほ

うが、自分のいままでの歴史と一貫性があるなというふうに思いますし、たぶん外国につながる人たちも増えていくでしょうし、労働者として。(Cさん)

## 7. まとめと考察

以下では、社会関係資本が外国につながる若者のキャリア形成にどのような影響を与えたかについて事例に基づき考察する。本稿における調査対象者11名全員が高校を卒業し専門学校以上の高等教育機関に進学していた。途中で学業から離脱していく者もいる中で、彼・彼女らが高等教育進学を果たせたのはなぜだろうか。それは、彼・彼女らが日本社会でサバイバルするために、言語・文化的障壁を克服する努力を怠らず向学的な態度を内面化することができたからといえよう。それに加えて、彼・彼女らが困難を抱え助けを必要としているときに、彼・彼女らに寄り添い手を差し伸べてくれた教師や仲間、支援者がいたことが大きい。

結束型社会関係資本については3名が繋がっていた。とりわけ親子の関係と同胞の仲間と強い結びつきがみられたが、エスニック・ネットワークとのつながりを語る者はいなかった。Dさんは大学卒業後、なかなか仕事が決まらず悩んでいたとき、母親の仕事の関係で就職先を得た。結束型の強みを生かしたキャリア形成といえる。就職先は出身国とは無関係の日本の企業である。

橋渡し型社会関係資本については、全員が学校関係や地域の支援団体等と繋がっていた。これは神奈川県が外国人集住地域で、学校や行政機関、市民団体、大学研究者などが長年外国人住民の抱える課題に取り組み、外国につながる子どもの学びを支えてきた歴史を有し、それらの人や組織の間のつながりから、外国人住民が必要な情報や支援にアクセスしやすいという特色があることによる<sup>5)</sup>。とりわけ、来日時学齢超過で中学に編入できなかった人たちの受け皿になったのが、地域の学習支援教室やフリースクールであった。Aさんは学校や行政組織、NPOなど多様なアクターと密接な関係を築き、自らもボランティア活動に関

わるようになった。その経験を活かせる行政の仕事に携わりたいと考えるようになり、豊富な資源を戦略的に活用することで公務員試験に合格し市職員として採用された。Hさんは中学時代の部活の日本人仲間の家にあった日本語の漫画や小説を譲り受けることができたことで、家庭で不足する文化資本を補うことができ学習意欲を維持できた。仕事の多忙な両親とすれ違い生活を送っていたCさんにとって居場所となったのが、中学から通い続け母国語で気楽に会話ができる国際交流ラウンジだった。高校受験の準備や大学AO入試の小論文の書き方なども、そのラウンジで指導を受けた。

外国につながる若者にとって、日本において進路やキャリア形成に有用な情報を得るための文化資本を親から得ることは困難である。本研究から地域社会における多様な人もしくは集団とのつながりが彼・彼女らの社会的、精神的な支えとなり、進路やキャリア形成に重要な役割を果たす可能性が示唆された。

本稿の調査対象者は、みな表2に示したように複数の言語能力保持者である。日本語能力試験N1を有している者が6名、N2が4名で、日常生活や仕事で日本語を使用している。出身国が英語を公用語している場合、高い英語能力をもつ者もあり、GさんとHさんはTOEICで高得点を得ていた。公用語の他に、方言や近隣国の言語を理解する者も少なくなかった。これらの複数言語能力の習得は、彼・彼女らが国境を越えて移動する経験を通して得られたものであろう。一方で、日本での滞在年数が長期化し日本語力が向上するのに反して、母語の能力が低下していると述べた者もいた。

また、聞き取り調査時の会話からは、彼・彼女らが親の呼び寄せによって、それまで住んでいた社会や親族・友人から突然切り離され、日本で暮らすことを余儀なくされたことへの戸惑いや葛藤がうかがえた。そのような困難やハンディを抱えながらも日本の学校文化になじみ日本語を習得し日本社会の規範を身につけていく過程で、それぞれが日本社会での居場所や生き方を模索し努力してきたことが窺われた。

本稿では、神奈川県外国人住民集住地域にお

ける外国につながる若者の事例を分析した。調査対象者の中には、大学進学後学習ボランティアに関わるようになり、母校で先輩として経験を語るなど後輩のロールモデルとして活躍する者もいた。高校を中途退学したり、出身国に帰国するなどして連絡の取れない卒業生もいるなかで、今回の調査対象者は比較的恵まれた状況にある若者たちといえよう。今後の課題として、学業を中断した若者や外国人住民散在地域の若者にも対象を広げて調査を行う必要があるだろう。

最後に少子高齢化の進む日本の状況と絡めて本研究の含意に触れておきたい。本研究の対象者は、来日当初ほとんどが「家族滞在」の在留資格であったが、現在は「永住者」「定住者」が合わせて過半数を占め、日本国籍を取得した者や帰化申請を予定している者もいる。日本で生活基盤を築き、将来にわたって日本社会の一員として暮らしていく若者たちといえる。グローバルな移動と異文化を身をもって体験し複数文化・言語能力保持者であるこれら外国につながる若者が、その能力を発揮し社会で活躍できるよう投資・育成していくことが将来の日本社会において有益と考える。

## 謝辞

本研究のインタビュー調査に協力してくださった皆様に深く感謝申し上げます。

## 付記

本研究は、JSPS科学研究費補助金(22K01839)の助成を受けておこなわれた。本稿は、日本移民学会第34回年次大会（京都、2024年6月23日）における研究報告「外国につながる若者の社会関係資本と進路」の内容を加筆修正したものである。本研究に関して開示すべきCOI関係はありません。

## 注

- 1) 1990年改正入管法では、日系人二世、三世に対して入国、滞在、就労が認められる「定住者」の在留資格が付与された。それ以降、就労活動に制限のない日系ブラジル人や日系ペルー人などが急増していった。
- 2) 連結型社会関係資本とは、完全にコミュニティ

の外にいるような、異なる状況にある異質な人々を結びつけ、コミュニティ内で利用可能な範囲よりもはるかに広域の資源を活用可能にすると定義されている。

- 3) 神奈川県が実施している特別募集では、外国籍を持っている人または日本国籍を取得して6年以内の人が対象となる。神奈川県の全日制16校、定時制4校で実施され、試験は3科目(英語・国語・数学)で、ルビつきの日本語で出題される(2024年2月1日現在)。
- 4) 露口(2016)は、校区内におけるソーシャル・キャピタル(以下、SC)の次元を①家庭SC、②子ども間SC、③子ども-地域SC、④学級SC、⑤学校組織SC、⑥学校地域SC、⑦保護者-学校SC、⑧保護者間SC、⑨保護者-地域SCに区分している。
- 5) 神奈川県における外国人生徒の支援と大学研究者の関わりについては、坪谷・小林(2013)を参照されたい。

## 引用文献

- Coleman, J. (1988). Social Capital in the Creation of Human Capital. *American Journal of Sociology*, 94, S95-S120. (コールマン, J. 金光淳(訳) 野沢慎司(編・監訳) (2006). 人的資本の形成における社会関係資本, リーディングネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本 勁草書房)
- Field, J. (2017). *Social Capital* Third Edition. Routledge. (フィールド, J. 佐藤智子・西塚考平・松本奈々子(訳) (2022). 社会関係資本 明石書店)
- 樋口直人・稲葉奈々子(2018). 間隙を縫う——ニューカマー二世代の大学進学—— 社会学評論, 68(4), 567-583.
- 是川夕(2018). 移民二世代の教育達成に見る階層的地位の世代間変動—高校在学率に注目した分析— 人口学研究, 54, 19-42.
- Lancee, B. (2010). The Economic Returns of Immigrants' Bonding and bridging Social Capital: The Case of the Netherlands. *International Migration Review*, 44(1), 202-226.
- 宮島喬・太田晴夫編(2005). 外国人の子どもと日本

の教育——不就学問題と多文化共生の課題 東京大学出版会

- 額賀美紗子(2021). イントロダクション——多様化する移民二世代のエスニック・アイデンティティ 清水陸美ほか著 日本社会の移民二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今. 明石書店. 43-68.
- オチャンテ村井ロサメルセデス(2020). 移民二世代の進路選択・キャリア形成支援における課題—三重県の事例を中心に— 桃山学院教育大学研究紀要, 3, 1-17.
- 太田晴夫(2000). ニューカマーの子どもと日本の学校 国際書院
- Portes, A. & Rumbaut, R. G. (2001). *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*. Berkeley: University of California Press.
- Putnam, R. D. (2000). *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. (パットナム, R. D. 柴内康文(訳) (2006). 孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生 柏書房)
- 佐久間考正(2006). 外国人の子どもの不就学——異文化に開かれた教育とは—— 勁草書房
- 志水宏吉(2014). 「つながり格差」が学力格差を生む 亜紀書房
- 清水陸美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平著(2021). 日本社会の移民二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今 明石書店
- 塩原良和(2011). 越境的社会関係資本の創出のための外国人住民支援: 社会的包摂としての多文化共生に向けた試論 法學研究: 法律・政治・社会, 84, 279-305.
- Takenoshita, H., Chitose, Y., Ikegami, S. & Ishikawa, E. A. (2013). Segmented Assimilation, Transnationalism, and Educational Attainment of Brazilian Migrant Children in Japan. *International Migration*, 52(2), 84-99.
- 丹野清人(2023). 日本の外国人・エスニシティの現状と課題 岸正彦・稲葉圭信・丹野清人編 岩波講座 社会学3 宗教・エスニシティ. 岩波書店. 257-278.
- 露口健司(2016). 子どもの学力・学習意欲 露口健司

（編著） ソーシャルキャピタルと教育. ミネルヴァ書房. 12-31.

#### 参考文献

樋口直人・稲葉奈々子編著（2023）. ニューカマーの世代交代——日本における移民2世の時代 明石書店

Kobayashi, H. & Tsuboya, M. (2021). Social Resources and Challenges Related to the Schooling and Education of Immigrant Children at High Schools in Japan. *Journal of International Migration and Integration*, 22 (1), 369-384.

坪郷實（2015）. ソーシャルキャピタルの意義と射程 坪郷實（編著） ソーシャルキャピタル. ミネルヴァ書房. 1-17.

坪谷美欧子・小林宏美編著（2013）. 人権と多文化共生の高校——外国につながる生徒たちと鶴見総合高校の実践 明石書店

山本晃輔・榎井緑編著（2023）. 外国人生徒と共に歩む大阪の高校——学校文化の変容と卒業生のライフコース 明石書店

（2024.9.25受稿, 2024.10.31受理）